

今回紹介する志那と矢橋は古くから開けていた港として知られ、明治5年に開港された山田港を加えて草津三港と呼ばれました。

うですが、東海道宿駅が整うにつれ「矢橋の渡し」と呼ばれ、江戸期には錦絵にも描かれました。

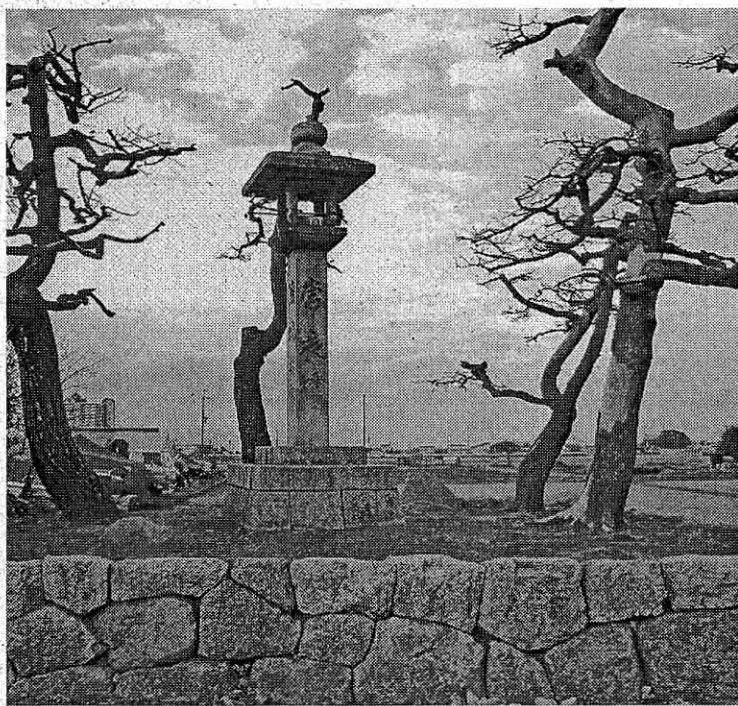
志那の港は、康和元(1099)年に京都の平家軍が北陸の源氏征討のため上陸したこと(『源平盛衰記』)や、長享元(1487)年、佐々木氏征討のために在陣していた足利義尚の釣館に將軍拜謁に訪れる公卿、僧侶が利用したということが知られていません。明治以降は、湖上交通の港として対岸の天津・石場との定期便も就航し、最盛期には年間2万人以上の利用者がありました。

さて、このように古代から続く古い港の志那と矢橋は、湖上交通の要衝として機能していた時期には繁栄していましたが、主要な輸送と交通手段が自動車へと変化するにつれて、その機能は薄くなっていきました。現在では、志那の港は漁港として存続していますが、矢橋の港はその姿を消してしまいました。

矢橋は、近江八景の一つ「矢橋帰帆」で知られた渡船の場です。万葉集にも地名が読まれたものがあり、そのころには既に港として機能していたことがうかがえます。寿永の乱(1180)~1185(年)以来、軍略地であったよ

現地を歩いてみると、移り変わりゆく景色というものを実感することが出来ます。まず志那の港ですが、周辺は静かな住宅地と農地が広がり、湖岸沿いには淡水真珠の養殖場も見られます。また、対岸には大きく比叡山を見ることが出来ます。この比叡山を昔の人たちも眺めていたことでしょう。街の風景や建物などは大きく変化していますが、

志那港と矢橋港



常夜灯と石垣だけが港の面影を伝える矢橋港跡
——草津市矢橋町

して大部分が埋め立てられ、昨年オープンした大型ショッピングモールが近江大橋の東のたもとに大きくそびえ、港から対岸を望むこともできなくなってきました。

なお、矢橋の港については草津市教育委員会により発掘調査が行われ、江戸時代の港跡の一部が明らかになっています。港跡は公園になっており、当時の石垣をそのままみることが出来ます。

変わらぬ風景もあることがよくわかります。

と刻まれた常夜灯が港の様子を伝えていきます。港は湖岸が最も内側に入り組んでいるところに設けられており、現在は静かな住宅地と農地となっています。「矢橋帰帆島」と

次に、矢橋周辺を歩いてみます。かつての矢橋港の面影はほとんど残っておらず、

「弘化三年」(1846年)

「弘化三年」(1846年)

「弘化三年」(1846年)

(滋賀県文化財保護協会 坂下実)

往時の港 伝える常夜灯